

パレスチナで循環を考える

昨年より JICA 技術協力プロジェクト「持続的農業技術確立のための普及システム強化」にかかわることになり、パレスチナ西岸地区をなんとか訪問する機会をもった。イスラエルによる占領政策が継続するという厳しく、著しく選択肢のせめられた現実のなかで農業生産・経営を安定させていく対処策を普及強化の観点もからめつつ模索・検討している。担当する畜産分野のテーマのひとつとして購入飼料への依存した生産体制からの脱却がかかげられている。畜産は有機的な耕畜連携を模索するうえでの要となり、そこでキーワードのひとつとなっているのが循環である。

おりからの原油価格高騰もありパレスチナの農民のなかには高価な穀物飼料への依存をやめて、より低コストで安定した家畜飼養を指向していこうとする機運がひろがりつつある。農民個人の圃場や地域レベルでの飼料の自給生産を立脚点にすると、マメ科牧草の導入、マッシュルーム菌床の飼料化、集水技術による草地改良、作物残さの利用、サイレージやフィード・ブロックの貯蔵飼料製造などが農民たちの検討課題となる。そこでは居住地周辺の自然資源への再評価を前提に未利用・低利用資源の飼料化の促進をはかることが基本方針であり、資源循環を成立させるための適応化試験、現地技術の開発・整備がもとめられている。パレスチナ農業にはムギ作とヒツジ・ヤギ飼養の伝統的な複合有畜経営の基盤があり、地域資源の有効利用のもとで経営を安定化させていくことをめざしている。それはパレスチナの農家にとっては無為に捨てられてきた資源の再利用であり、言ってみれば「もったいない」精神での循環の再意識化である。

また、高度成長以前のふるきよき日本の農業形態やこんにちの有機農業運動であっても個人・地域レベルで出発するという意味において上述のパレスチナでめざしている循環とおなじで共通の発想にたっている。ところで、循環の強調はちょっとわれわれ日本人の心の琴線にふれる言葉なのか、最近では各方面でさかんに循環技術が議論され、たんに美しいキーワードとして氾濫・多用されているくらいがあるようにおもう。たとえば、日本の畜産でトウモロコシや大豆など穀物飼料への輸入依存からの脱却をめざすといった場面で見られる循環はどう考えたらいいのであろうか。外国からの穀物飼料の大量輸入、効率をひたすら追求した集約型畜産の帰結として家畜糞尿の集積化。こうして大量にもちこまれたものをいかに「処理」するかという次元の問題がおなじように「循環」という言葉でもって安易に語られることに多少なりとも違和感があるのである。ここでは穀物飼料の輸入を極力削減し、自給飼料の割合を高めつつ環境負荷要因を取りのぞいていくことがより根本的な処方箋といえるのではないだろうか。なにもかもひっくりかえり循環だけを美しく強調するのは問題のすりかえであり本質をひずめているように感じる。

ケニアのマータイさんの「もったいない」は 3R の精神で表現されるという。すなわち Reduce (減量), Reuse (再利用), Recycle (再処理) の 3 つの R であるが、相対的に前二者の比重が三番目の Recycle より高く、もっとも重要なのは一番目の Reduce であろう。物質文明にどっぷりつかったわれわれ現代の日本人に切実に求められているのは、まずは「減量」であり「低負荷」への舵とりではないかとおもう。(古賀 2009年4月)



作物残さによるサイレージ製造



マッシュルーム菌床の飼料化



ヨルダン溪谷での放牧